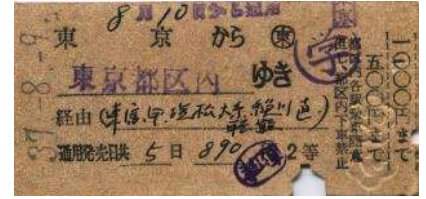


中部地方回遊の旅（東京から東京への旅） <復刻版>

昭和37年8月10日 <東京→富士→下部>

東京発 5時56分各駅停車富士行。天気は上々、野宿を基本とした中部地方回遊の旅は幸運なスタート。メンバーは佐藤・白尾・高橋・小林の四名。

この旅のキップは「東京発で東京行の回遊キップ（富士・甲府・塩尻・松本・大糸線経由糸魚川・直江津・軽井沢・熊谷経由）」。距離計算により、通用日数は5日間。途中の寄り道はすべて途中下車スタンプをもらって下車することになり、このキップの経路から外れた場所へ行く場合は、途中下車してあらためて現金で払わなければならない。値段は学割で890円。



富士9時11分着。私の故郷（吉原）を散歩する時間をもらって皆を案内することになった。バスで吉原市へ行き、浅間神社などを散策。（バス代は往復で30円）

身延線は富士発12時10分甲府行。隣の席に座ったおばさんが話しかけてきたので、下部まで行き野宿することを話すと親切に地元のことを色々教えてくれた。

下部13時54分着。バスで湯町（ゆのまち）へ。バス代は10円。五万分の一の地図を見ながら野宿に適した場所を探した結果、湯川の河原で夕食。ご飯を炊いて、おかずはカツオのフレークとサバの缶詰。通りがかったおばさんが「そんなところで野宿しないで家へ来なさい」と言う。

指示に従っておばさんの後からザックを背負った怪しげな四人がぞろぞろ。おばさんは湯元ホテルの経営者の奥さんらしい。着いた所はこのおばさんの自宅で、

「板張りの広い台所を一部屋開放するからここでゆっくりしなさい」と言い、

「野宿して旅行するぐらいだから私は何も面倒は見ないね。台所は自由に使っていていいから自分たちで勝手にやりなさい」

かくして、野宿の旅の初日は立派なお家の台所で寝袋に入って寝ることになった。20時40分就寝。

昭和37年8月11日 <下部→甲府→上諏訪>

朝食を済ませて、お礼を言うとともに「旅が終わったらお礼状を出したいから住所と名前を教えてください」と言うと言った文字でしたためて下さった。



出発前に一緒に記念写真を撮りたいと申し出ると、奥から息子さん達を呼んで来て一緒にカメラに治まってくれた。

天気は快晴、8時05分のバスで下部駅へ。身延線は8時22分発の甲府行。甲府には5,6分遅れで9時32分に到着。

甲府発10時01分各駅停車長野行。蒸気機関車がどっかりと腰を下している。辛うじて席が取れる位の混み方。

龍王駅を離れると徐々に上り坂になり列車の速度は落ちて、

何度もスイッチバックを繰り返すようになった。

韮崎を過ぎる頃に検札に来た車掌と雑談。韮崎から小淵沢までの間で七両の検札が終わるといふ。大変な仕事だなと感心していると、こんなことも言っていた。

「混雑する季節には、上野を出ると同時に検札を始めて長野でやっと終わったなんてこともあるんだよ」小淵沢で駅弁を買って、甲斐駒を車窓に眺めながら昼食。

上諏訪で下車 12時45分。予め地図上で見つけておいた神社の境内で野宿するつもりで、バスに乗り角間新田上で下車。五万分の一の地形図の神社のマークを頼りに無事予定地に到達。

夕食は佐藤君が鼻の頭をアブに刺されながらカレーライスに挑戦。19時半に就寝。

昭和37年8月12日 <上諏訪→松本→糸魚川→親不知→市振>

5時起床、快晴。朝食をとり7時28分の上諏訪行のバスに乗るつもりだったが、残念ながら乗り遅れた。7時44分のバスに乗車。上諏訪駅に8時に到着。駅の中を駆け抜けて8時08分の長野行に飛び乗り。

松本着は2分遅れの10時00分。

大糸線は11時47分発の信濃大町行。信濃大町で30分弱の待ち合わせで信濃森上行に連絡。

木崎湖・青木湖を車窓から楽しんでいる内に信濃森上に到着。

信濃森上でまたまた乗り換えると今度はディーゼルカー。糸魚川に15時27分着。遂に日本海に到着。

北陸線は15時56分発、再び蒸気機関車。青海を過ぎるとトンネルばかりで頻りに黒い煙が車内に入ってくるので喉が痛くなってきた。親不知で下車して海辺の手頃な野宿場所を探したが、適当な場所が見つからない。

止むを得ずバスで市振へ移動。駅から地図を見ながらしばらく歩いたところで神社を発見。

海岸での夕食はインスタントラーメンと缶詰のおかずと海水で揉んだキュウリの即席漬。水平線の向こうに能登半島が見える。郵便局の局長さんという方が来て海辺で雑談。

食後は銭湯を見つけたので入浴し、神社の境内に宿泊。

奥の細道の一句「ひとつ家に遊女もねたり萩と月」を思い浮かべながら23時に就寝。



### 昭和37年8月13日 <市振→直江津→柏原→夜行列車>

4時半起床。今日も天気は上々。海岸へ出て飯を炊き朝食。

ご飯炊きに失敗し少々美味しくないと朝飯になった。

市振発8時51分の列車に乗るつもりだったが間に合わず。次の列車まで二時間以上あるので、再び海へ出て時間つぶし。

市振発11時01分直江津行。能生付近で海岸にいる海女に手を振ったら向こうでも手を振ってくれた。

直江津の駅前食堂で昼食。直江津発は2分遅れの13時25分。デッキで景色を見ていたら、側にいたお婆さんが黒姫山・飯縄山・妙高山・野尻湖などについて色々教えてくれた。

柏原着15時03分。高橋君は鼻血が出てきたので駅で休憩。残りのメンバーで野尻湖へ。

野尻湖へはバスで往復50円。100円でボートを借りて島へ渡って見たが、水は汚いしあまり居心地の良い湖ではなかった。

柏原駅に戻って食堂で夕食。そろそろ皆疲れてきた感じ。

20時10分発の夜行列車に乗車。直江津発で空いていたのでちゃんと席を確保できた。

長野を過ぎたあたりで眠りについた。途中軽井沢で目が覚めたら殆どの席が埋まっていた。

### 昭和37年8月14日 <夜行列車→上野>

次に目が覚めたのは大宮。そして上野着4時30分、これにて旅は無事終了。

以上

### あとがき（後日譚）

定年退職後、身の整理をしていたら下部温泉のホテルのおかみさんから来た一通の手紙が出てきた。

この旅での写真（上記）を送った後でいただいた返礼だった。読み直している内に、あの日のお礼をもう一度言いたいという気持ちと、下部温泉に実際に入って見たいという願望が盛り上がってきた。

そしてある日、この写真を携えて一泊の旅に出て見た。

フロントでチェックインの手続きをしながら、応対に出た男性に恐る恐る写真を出して話を切り出してみた。

「ああ、これは母ですね」、この男性は息子さんだった。

無謀な旅に出た少年達を優しく迎え入れて下さった奥さまは既に他界され、ホテルの経営は息子さんが引き継いでいた。下部温泉は寂れた温泉に変わっており、時の流れとその間の世の中の変遷を強く感じた。

武田信玄の隠し湯として、戦士たちの傷を癒す効果があるとされてきた湯を、18歳の夏の日を思い起こしながらじっくりと堪能してきた。

冷泉と温泉とを交互に入ると、芯から温まり体がフワッと軽くなるようだった。

さらに何年後か、この旅のメモ帳が机の下の箱から出てきた。かなり損傷が進みボールペンの文字も一部判読が難しくなっていたので、電子化保存することにした。誤字・誤記以外はメモ帳の記述どおりに入力した。